「１９９９年　歴史学の現在」

桂島宣弘（立命館大学文学部教授）

確かにわれわれは、一九九〇年代を経過して、キャロル・グラッグのいう「戦後歴史学の終焉」に遭遇している。「多すぎる個別研究、総合の欠如、少なすぎる政治、社会史の氾濫、そして知的ダイナミズムの欠落」とグラッグが呼んだ状況だ。歴史学や歴史が終焉したという乱暴な議論に与できないにしても、一九九〇年代を通じて歴史学に突きつけられることになった問題は、それが方法や叙述に関わる、いわばメタレベルのものであっただけに深刻だ。ここで簡単に整理しておくならば、それは三つの問題群からなっているといえそうだ。一つは、歴史を書く行為自体を問う、酒井直樹のいう「言遂行的問題」。歴史を書く行為が何を行ってきたのか、実は近代国民国家の文化的構築物であった歴史学の記述が、無自覚的に国民国家を言説上に実体化してきたのではないかというのである。もう一つは、いわゆる「言語論的転回」以降の「客観的知」に対する根本的懐疑。歴史学のみならず、あらゆる人文・社会科学に発せられたその問いは、歴史学の場合は歴史実証主義という自明性を帯びてきたランケ派以降の歴史哲学の再検討をあらためて要請している。そして最後に、公然と国民史や記憶の書き換えを要求する「自由主義史観」などの歴史修正主義との対決の問題。「自由主義史観」論者の主張自体はきわめて稚拙なもので、しかも戦後何度か繰り返し主張されてきたことの焼直しという面もある。だが、それとの対決の上で、歴史学の方法的問題、上野千鶴子の主張に従えば、歴史的事実とは何かという問題、国民史を前提とした責任主体の問題、さらに歴史記述とジェンダーの問題などが浮上してきたのである。

これらの問題群は、いずれも戦後歴史学が各グランド・セオリーの土台に暗黙理に埋め込んできた枠組み、例えば「日本固有の歴史」の実在、あるいは（史料批判を経た）文献史料に論理的に妥当な解釈を施すことで客観的な歴史記述が可能となるという方法を、根底から揺さぶっている。したがって、正直にいえば、これらの問いかけに応えることは容易なことではない。だが、われわれがなすべきことは、直ちに歴史学に解体を宣告することでもなければ、逆に歴史学というギルドの内側に職人的に閉じこもることでもないはずだ。要請されている作業は、十九世紀以降の歴史学という文化的構築物の歴史を、さらには官学・民間を貫いての日本史学の認識構造の歴史を、歴史学の内部でも今こそ再検討することなのではないだろうか。

目を転ずれば、アナール派歴史学などニューヒストリーの潮流が、歴史記述や史料解釈の方法に注目すべき刷新をもたらし、「ショアー」がオーラルヒストリーの可能性を示すなど、必ずしも歴史学にとって悲観的なことばかりが起こっているわけでもない。そして、これらの新しい動向がわれわれに問いかけているのも、史料・方法・解釈の様式、要するにメタヒストリーに対する鋭敏な感覚なのである。